

あの戦争を語り継ぐ  
平和都市宣言  
30周年記念連載⑨

栗谷川一郎さん 82歳

清水口地区在住

戦時生活と米軍進駐

私が横浜に住んでいた国民学校1年の時に太平洋戦争が勃発しました。当初は勝利が続くも1年後には戦況も悪化し、やがて空襲による敵機B-29の爆撃が開始され、1日数回の空襲が入りました。夜も空襲警報が鳴ればすぐに避難しなければならなかったため、服のまま寝て、風呂(銭湯)にも入れずシラミと、そして空腹との戦いの連日に死んでもいいから一度空腹を満たし、裸で寝たいと

思いました。食糧事情が悪化し、授業時間は空地でイモ、トウモロコシ作りとなり、低学年で小柄の私には重労働でした。

朝礼では毎回宮城遥拝(皇居の方角への敬礼)や将校の訓示があり、空腹で不動の姿勢を保てないで倒れると、女の子でも軍刀の柄で尻をたたかれたりしました。

やがて学校も閉鎖となり、友達が集団疎開または縁故疎開で散り散りとなり、私たち一家も青森県として岩手県の親戚へ身を寄せているうちに小学校を5回転校して終戦を迎えました。終戦間もなく米軍が疎開先の岩手県のへき地にも進駐してきて、私たち子どもは米兵からチョコレートやガムをもらって大喜びでした。

旧制中学校で英語教師をしていた父は外務省通訳官として、武装した軍人とジープで飛び回っていました。家にも青い目の大柄な将校がやって来て、最初は怖かったです。笑顔を話しかけられたので英語に興味を持ち始めました(これが現在の私の国際交流活動の原点となりました)。

大人用の野球道具一式をもらい友達と暗くなるまで遊んだことが楽しい思い出となっています。

◆疎開 第2次世界大戦末期に攻撃目標となりやすい都市に住む児童や高齢者を田舎に避難させる政策がとられた。

■ 企画政策課男女共同参画室内線3354

※体験談を募集しています。